

## 【歴史と大自然に学ぶ】

### 先人の知恵に学ぶ

九月二十七日昼前、長野県と岐阜県の県境にある御嶽山が噴火したニュースが、恐ろしい映像と共に私達を震撼させました。

阪神淡路大震災・東日本大震災・広島土砂災害に続いて御嶽山の噴火、大地震や津波、そして火山災害：異常気象に伴う様々な自然災害が止まりません。私達に対する大自然からの何か警告めいた戒めでもあるのでしょうかでしょうか？自然への敬虔な気持ちが必要ないからでしょうか？いずれにしても、私達は「今ある命」に対して、感謝の念を深めずにはおられません。

御嶽山噴火後、登山者は山小屋でお互い怪我や疲労を労りながら、不安な一夜を過ごされた様子を「沢山の人に支えられて、生き長らえる事が出来ました」と、語っておられました。「とにかく生きよう」「頑張り」「諦めるな」…生死を分けた人間同士が、折れそうになる心を奮い立たされた数々の言葉（言葉に宿る霊的な力）が飛び交ったそうです。いざとなれば普通の人間が神仏様の様な存在に成れるんだなあと、改めて気付かされました。

## 【人生の課題と可能性】

私達人間は誰しもが、人生という自分の課題を用意して、その課題に立ち向かう力も備えた上で、誕生させて頂いているのではないかとそう思う事があります。仮にそうだとすれば、その課題が大きければ大きいほど、自分に備わるその力もきつと大きい筈です。人生の困難が目の前に立ちはだかった時、自分に備わるその力を信じられるかどうかは、それもまた自分次第でありましょう。

同じように仏教でも、人間の可能性の大きさが説かれています。私達一人一人に『**仏種（ぶつしゆ）**』という《**仏様に成るための種**》が具わっている事が説かれています。各自の心に具わるその**仏種**という心の種が具わっている事に気がつき、そして気がついたならば、その種に肥料を与えるべく、各人に与えられた日々の課題に正面から向き合い、日々の精進を怠ることなく行いなさい。そうする事で各人が非凡になり、傍から見ればまさに**仏様**の様な振る舞いを実践している尊い存在に成長することが出来る事を示唆されています。そもそも**仏様**というのは架空の存在ではなく、**仏様（覚者）**というのは、精進修行し、その結果として目覚めた人、つまり**覚者（仏様）**と称するわけです。

ところで私達富山県民は、全国でも

有数の「真面目」で「信仰心が厚い」県民と言われますが、それを立証する歴史的事実があります。富山県民の誇りを再確認すると共に、歴史に学んでみたいと思います。

### 【富山の国土】

日本の領土は全て島。いわゆる島国の日本列島は海に囲まれた四つの島国で、温帯にあり、海から上がる水蒸気が三千メートル級の山に当たり、その水が川をつくった国土です。周囲を海に囲まれているので「**海の国**」とも言えるし、三万本もの川があるので「**川の国**」とも言えますし、沢山の山脈があるので「**山の国**」とも言えるでしょう。いざれにしても大自然に囲まれた島国日本には、どの地域にいても自然の猛威を避けることは出来ない土地柄とも言えます。その中であって、専門研究者いわく「**富山県は、全国で最も自然災害が少ない土地柄**」と言われております。専門家によれば、「富山県は大地震発生のリスクが低く、今後三十年間の震度六以上の大地震発生確率は、東京・大阪・名古屋の三大都市圏が二十六割以上であるのに対し、六割以下」と、県民にとってホッと胸をなで下ろす見解を示してくれています。また大地震が発生した場合でも、富山県を囲む北アルプスの地下にあるマグマ状の岩石帯が地震波を吸収するため、揺れが小さくなるとの事です。ただこれは確率の

話で、専門家も人間ですから想定外の状況もあり得ます。ただ少なくとも専門研究者が、「富山県は安全地域」と大鼓判を押している事実は、富山県民にとって何より心強いですね。

### 【富山の文化】

そんな富山県の文化は、変化に富んだ自然との関わりなしには論じられません。立山の頂上から富山湾岸にかけて森の中に鎮座する神社や寺院、県境に接する五箇山に静かなたたずまいを見せる合掌造り、広大なとなみ野に屋敷林の点在する散居村そして海岸から沖合いに敷かれる幾何学模様の定置網など、全てが富山特有の自然風土が生み出した文化と言えます。

北陸とか北越と「北」いう字で呼称されるのは、七世紀に都が奈良にあった頃の方位で、今日では日本列島の真ん中と言ってよいでしょう。台風の季節にはいつも荒れ狂う南日本とは違って、日本海は湖のような静けさを保っており、暖流が北上していることもあって、真冬に大雪が降ってもさほど寒くはありません。ただ、一月から二月にかけて「あいの風」が吹くと海は荒れますが、これはいわゆるブリ起こしで、当地ではまさに幸を呼ぶ風。富山湾のブリは脂が乗って、しかも身が引き締まっているせいか、太平洋岸のブリよ

り値も高い。

万葉集で高志と呼ばれたころの北陸は、東大寺の荘園の中心地であり、越中守大伴家持の秀歌も手伝って、越の国はかなりよいイメージを保っていました。事実、八一〇年伏木に外国語専門学校が設けられた事でも分かる通り、日本の玄関口であり、人口も密集していたという記録が残っています。江戸期に日本海を通って大坂と北海道を往来していた北前船が、太平洋岸を行く樽回船の十倍も多く、北陸の繁栄ぶりを充分に推察できます。

富山県の文化を調査する中で最も驚いた事は、明治十六（一八八三）年、富山県が分離独立する前の石川県の人口は一八三万人で、一五五万人の新潟県を押さえて日本一だったという事実でした。

## 〔富山県の宗教風土〕

全国の神社を総計するとおよそ八万二千社あり、最も多いのが新潟の四千八百社。富山県は京都の千八百社や奈良の千四百社をはるかに上回る二千三百社で、人口比なら全国第三位となります。一方、寺院の総数約七万七千寺のうち、愛知の四千六百寺がトップで、富山県は千七百七十寺ですが、人口比なら第五位となります。またキリスト教会は少なく、富山県は全国で最少県。社寺はいず

れも平均値の二倍半を数える富山県は、数値の上でも伝統的な宗教風土の豊かな土地柄と言えます。

三三の調査では、全国で神棚と仏壇が同居している家庭が四十五%だが、北陸では同居が大半を占めており、とりわけ富山県では玄関に神棚、床の間に天神様の木彫があるかと思うと、奥座敷には金ピカの仏壇が置かれている家も多い。

私達の先祖は霊魂の不滅を信じ、年に一度天から神霊が降りて来るのを待ち望んでおられた。氏子たちは築山を造ってお迎えしたが、久しぶりに家に帰ってもらいたいという念願から、築山が山車となり、山を引く曳山となつて、街に住む氏子の家々を回ります。

高岡の優雅な御車山をはじめ、魚津の勇壮なたてもん、山車をぶっつけ合う岩瀬や伏木のけんか祭りなど、これほど多彩で熱狂的な曳山が年中続く地域は、他県には見られないのだそうです。およそ二五〇曲を数える民謡の中には、魚津のせり込み蝶六のような（仏事に関するもの）が多いのです。

明治維新の折、まず神仏を分離してかかるのが近代化の近道とばかりに、神社から仏像、経巻、法具などを取り払い、それが高じて排仏棄釈の運動が広がっていききました。

最近の発掘調査によって北陸の宗教文化の源流は縄文期にまで遡ることができるようですが、各種のデータが示

す北陸の豊かさは、大昔から伝わる賢明な暮らしの知恵と神仏への敬謙な信仰心によるものだと思います。日本の先人は上手に水を治めていました。洪水の起こりやすい氾濫原にこそ肥沃な田畑ができることを知っていた彼らは、暴れ川を上手に導き、豊穡の大地をつくってきました。川の水は田畑の米や野菜を育み、子供達が泳ぎ遊び、魚を獲り、飲み水、洗濯、風呂など、生活のあらゆる場面で川が生きていました。日本のどこでも井戸を掘ればきれいな水が湧いて出ました。治水が進んだ現在、夏の水不足は年中行事となり、水害は過去よりも増えています。余談ですが、今からザッと百五十年前、明治維新の時に、川に対するスタイルを大きく変えました。三百年も鎖国してきた日本人は、自分達が三百年分遅れていると思ひ込んでしまい、そこで維新の中心メンバーが行ったことは、先進国のヨーロッパに行き、とにかく最先端の技術を仕入れることでした。議会制度はイギリスに学び、日本にとって一番大切な林業政策はドイツに学び、川にどう対処するかはオランダに学んだのです。そうやって日本政治の基盤を確立していった歴史がありました。今ある私達は、先人の知恵に学び、大自然に学び、自分の命と謙虚に向き合わなければなりません。私達人間は、大自然の一部であり、その大自然の中で生かされているという

事を再確認したならば、今ある尊い命を輝かせる努力に務めなければならぬでしょう。それが生きているという証なのですから。合掌

副住職 谷川寛敬

